

INCLUSIVE JOURNAL OF EDUCATION

Bd[` f WV \$ " # + ž " * % " A ` ^ [` W ;
BgT^ [e Z W W T k 3 e [S ` E a U [W f k a X



? WYg_ [? ; K35: ; = 3
M5Z [Z [da Ž _ S dg O

ORIGINAL ARTICLE

重度・重複障害児教育の目標設定の課題と QOL 指標の活用可能性

Challenges in Setting Educational Target for Children of Profound Intellectual and Multiple Disabilities and the Possibilities of Utilizing QOL Index

照屋 晴奈¹⁾²⁾
Haruna TERUYA

趙 彩尹²⁾
Chaeyoon CHO

矢野 夏樹²⁾
Natsuki YANO

金 彦志^{3)*}
Eonji KIM

1) 琉球大学教育学部
Faculty of Education, University of the Ryukyus, Japan

2) 東北大学大学院医学系研究科
Graduate School of Medicine, Tohoku University, Japan

3) 宮城学院女子大学, 学生相談・特別支援センター
Disability Services Center, Miyagi Gakuin Women's University, Japan

<Key-words>

特別支援教育, 重度・重複障害児, 教育目標, QOL 指標, 自立活動
special needs education, children of profound intellectual and multiple disabilities, educational target, QOL index, independent activities

* 責任著者: eonji0519@mgu.ac.jp (金 彦志)

Journal of Inclusive Education, 2019, 7:50-62. © 2019 Asian Society of Human Services

ABSTRACT

重度・重複障害児への教育は、意思表示や実態把握の難しい等の課題があること、また、新学習指導要領で求められる、子どもたちが「何ができるようになるのか」、資質・能力を育成するために「何を学ぶのか」という、具体的な教育目標を示すことの課題があった。そこで、自立活動の内容と QOL 尺度を対応させ、QOL の観点が具体的な教育目標として活用できるのではないかと考えた。新学習指導要領の自立活動 6 区分 27 項目に 2 つの QOL 尺度を対応した結果、すべての項目が自立活動の内容に含まれる可能性があることが分かった。自立活動の内容に当てはまらなかった QOL 尺度の項目内容として、経済に関する教育と性教育についての課題が示唆された。

本研究により、新学習指導要領が実施される今後の教育について、重度・重複障害児への教育は QOL 尺度の項目内容が子どもたちへの教育目標として活用できる可能性あることが明らかとなった。

Received
29 July, 2019

Revised
9 August, 2019

Accepted
14 August, 2019

Published
30 August, 2019

I. 研究背景と目的

重度・重複障害児の定義として、これまでの法律や研究から、小原・韓（2015）は「重度・重複障害児とは、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由者及び病弱について原則的には学校教育施行令第22条の3において規定している程度の障害を複数併せ有し、他人の全面的な介助を必要とする発達段階が0歳から2歳未満の発達段階にある児童生徒」としている。平成29年4月に文部科学省により改訂された新学習指導要領において、重度・重複障害児者の指導は、「重複障害者のうち、障害の状態により特に必要がある場合には、各教科、道徳科、外国語活動若しくは特別活動の目標及び内容に関する事項の一部又は各教科、外国語活動若しくは総合的な学習の時間に替えて、自立活動を主として指導を行うことができるものとする（特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第1章第8節）。」と示されており、前学習指導要領に引き続き、重度・重複障害児への教育は「自立活動」の観点を重視した指導が求められている。

しかし、「自立活動」について教師が作成した学習指導案を見ると、「自立活動」の6区分27項目の中からいくつか選択し、教育目標や学習目標としてそのまま記述している指導案が多くみられた。しかし「自立活動」は、個々の幼児児童生徒に合わせた教育指導を行うための観点である。教師が子どもの実態把握をしっかりと行った上で、「自立活動」の観点から、子どもたちに合わせた指導を計画していくのである。しかし、「自立活動」6区分27項目に記載されている文言をそのまま教育目標として指導するのは、子どもの実態に合わせた指導といえるだろうか。

また、重度・重複障害の指導の現状について、川住・野崎（2011）は、全国の特別支援学校教員に行った調査において、子どものQOL（Quality of Life）向上という観点から指導内容を見直す必要性を指摘する回答がいくつもあったことが明らかとなった。板野（1996）は、「最初からQOL思想を考えずに身体訓練ばかりを行ってはいは、身体的には歩行可能という高いレベルにあっても人生を楽しむといった生活の質を高められない人もいる。」と指摘している。つまり、日常生活のための訓練などを目的とするのではなく、QOLの向上の目的とするための観点や手段として「自立活動」を実施していくことが重要となるであろう。よって今後、重度・重複障害児への教育は、子どもたちのQOLの向上を目指すものになると考える。

そこで本研究は、重度・重複障害児への教育の目標設定の課題を明らかにし、重度・重複障害児の教育でこれから求められてくるQOLを測定する尺度と学習指導要領の「自立活動」の内容の対応分析を行う。そして、これからの重度・重複障害児への教育はQOL向上の観点が具体的な教育目標としての活用できるのか否かを検討していく。

II. 重度・重複障害児教育の目標設定の課題

平成29年4月、文部科学省により学習指導要領が改訂された。それに伴い、中央教育審議会は、平成27年9月に初等中等教育分科会にて、新しい学習指導要領等の在り方について、「各学校が今後、教育課程を通じて子供たちにどのような力を育むのかという教育目標を明確にし、学習指導要領等に基づく指導を通じて子供たちが何を身に付けるのかを明確に示

していく必要がある。そのためには、学習する子供の視点に立ち、教育課程全体や各教科等の学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点から、育成すべき資質・能力を整理し、資質・能力を育成するために「何を学ぶのか」という、必要な指導内容等を検討し、その内容を「どのように学ぶのか」という、子供たちの具体的な学びの姿を考えながら構成していく必要がある」としている。このように、今後の日本における教育は、子どもたちに具体的な教育目標を示していくことが求められているのである。

しかし、重度・重複障害児者の教育の課題について先行研究によると、長野・川間（2018）は、特別支援学校（肢体不自由）に在籍する重複障害児のうち、知的障害を併せ有し意思表示に困難のある重度・重複障害児は、見た目の障害の重さによって知的機能の側面も低く捉えられがちである、と指摘している。また、佐島（2009）によると、彼らの知的機能の水準の低さは生活経験・学習経験の制限の影響を受けたものであり、潜在的にはより高い能力水準にある可能性があるとされている。そのため、重度・重複障害児の指導においては、本来の知的機能や潜在的な能力水準を把握することが重要となる。しかし意思表示の困難さから、何をどこまで理解しているか客観的に確認する手段が制限されているため、重度・重複障害児の全体像を捉えることは非常に難しい（長野・川間，2018）、と指摘されている。

また、重度・重複障害児への教育は、児童生徒の障害の状態が一人ひとりで異なるのだが、その障害の特性から大きな課題が指摘されている。日々の児童生徒の教育指導は教師が行うため、児童生徒の様々な障害の状態に対し、一人一人具体的な作成の手順や実態把握の内容等は各学校が考えるべきとされているのである。しかし、長野・川間（2018）によると、各学校が実態把握の内容や範囲をどのように明確にすればよいのか、また実態把握を通して得られた多様な情報をどのように整理し、指導目標を導き出せばよいのかについては示されていない、と指摘している。

そのような中、研究機関や特別支援学校における児童・生徒の実態把握の研究については、「重度・重複障害児の実態把握のため、あるいは実態把握から指導目標を導くためのツールの研究・開発がなされている（長野・川間，2018）」と述べている。しかし、実態把握を行った後の、具体的な指導目標や指導内容については指摘されていない。

そこで、小原・韓（2015）は、重度・重複障害教育の指導は QOL 向上の観点を考える必要があると指摘し、QOL の観点に基づいた重度・重複障害児の教育課程と指導法の分析を行った。その結果として、現在学校現場で実施されている、重度・重複障害児の指導法は、重度・重複障害児の QOL 向上を促すものであることが分かった。しかし、指導法ひとつひとつは QOL 領域すべてに該当するものではなく、また、児童生徒の実態によって適切な指導法が異なることから、教師がどの指導法が QOL のどの領域に該当するかを把握した上で指導することが求められることが指摘された。

先行研究により、重度・重複障害児の教育について難しいと指摘されている実態把握のためのツールや、評価に関する研究が進められていること、また学校現場で実施されている重度・重複障害児への指導法については、QOL の向上の可能性があることが示唆された。しかし、新学習指導要領で求められている、教育課程全体や各教科等の学びを通じて「何ができるようになるのか」、資質・能力を育成するために「何を学ぶのか」という、具体的な教育目標を示すことに関する課題が依然残っているのではないかと考えられる。

Ⅲ. 重度重複障害児教育の目標設定における QOL 指標の活用可能性

1. 重度・重複障害教育と QOL の関係性に関する先行研究

近年、重度・重複障害児への学校教育において、児童生徒の QOL (Quality of Life) の向上が言われてきている (小原・韓, 2015)。学校教育においては、姉崎 (2012) によると、障害が重度化、重複化するにつれて、教育課程上、自立活動の時間が占める割合が増加し重視されている、としている。そのことから、小原・韓 (2015) は、重度・重複障害教育の指導は QOL 向上の観点を考える必要がある、と指摘している。

そこで、小原・韓 (2015) は、重度・重複障害児の指導法と QOL (SF-36) の領域を対応分析した。学習指導要領で定める「自立活動」の 6 区分と、SF-36 の 8 領域、特別支援教育成果評価尺度 (SNEAT) の 3 領域 11 項目の 3 つの観点から対応分析を行っている。その結果として、現在学校現場で実施されている、重度・重複障害児の指導法は、重度・重複障害児の QOL 向上を促すものであることが分かった。しかし、指導法ひとつひとつは QOL 領域すべてに該当するものではなく、また、児童生徒の実態によって適切な指導法が異なることから、教師がどの指導法が QOL のどの領域に該当するかを把握した上で指導することが求められることが指摘された。

しかし、この研究により、重度・重複障害児教育で行われる「自立活動」の指導が QOL 向上を促すことが確認された。Ⅱで指摘したように、重度・重複障害児教育は教育目標に関する課題が残されているため、様々な QOL 指標と新学習指導要領の自立活動の内容の対応分析から、具体的な教育目標として提示できるのではないかと考える。

2. 新学習指導要領の自立活動と QOL 指標

新学習指導要領における自立活動は、区分については改訂前の自立活動 6 区分 (表 1) と変更はないが、項目については 1 項目増えている。「1. 健康の保持」に新たに「(4) 障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること」の 1 項目が追加され、6 区分 26 項目が、6 区分 27 項目となった。また、「4. 環境の把握」の区分の下に設けられていた「(2) 感覚や認知の特性への対応に関すること。」の項目が「(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること。」と改められ、「(4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握に関すること。」の項目が「(4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること。」と改められている。本研究では、新学習指導要領の自立活動 6 区分 27 項目を分析する。

QOL 指標に関しては、WHO QOL26 と、KINDL^Rを使用する。WHO QOL26 は、疾病の有無を判定するのではなく、受検者の主観的幸福感、生活の質を測定するものであり、身体的領域、心理的領域、社会的関係、環境領域の 4 領域の QOL を問う 24 項目と、QOL 全体を問う 2 項目の、全 26 項目から構成されている (田崎, 1998)。KINDL^Rは、子どもの QOL を測定するための尺度であり、幼児版、小学生版、中学生版の自己評価用の 3 つと、幼児版親用、小・中学生版親用の 2 つの計 6 つの質問紙で構成されている。6 領域 24 項目で構成されており、領域は、身体的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友達、学校生活の 6 つである (古荘・柴田・根本ら, 2014)。

表1 新学習指導要領の自立活動6区分と内容

領域名	内容
1. 健康の保持	「健康の保持」では、生命を維持し、日常生活を行うために必要な健康状態の維持・改善を身体的な側面を中心として図る観点から内容を示している。
2. 心理的な安定	「心理的な安定」では、自分の気持ちや情緒をコントロールして変化する状況に適切に対応するとともに、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服する意欲の向上を図り、自己のよさに気付く観点から内容を示している。
3. 人間関係の形成	「人間関係の形成」では、自他の理解を深め、対人関係を円滑にし、集団参加の基盤を培う観点から内容を示している。
4. 環境の把握	「環境の把握」では、感覚を有効に活用し、空間や時間などの概念を手掛かりとして、周囲の状況を把握したり、環境と自己との関係を理解したりして、的確に判断し、行動できるようにする観点から内容を示している。
5. 身体の動き	「身体の動き」では、日常生活や作業に必要な基本動作を習得し、生活の中で適切な身体の動きができるようにする観点から内容を示している。
6. コミュニケーション	「コミュニケーション」では、場や相手に応じて、コミュニケーションを円滑に行うことができるようにする観点から内容を示している。

文部科学省（2018）特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編
（幼稚部・小学部・中学部）より引用

3. 自立活動と QOL 指標の対応分析結果

新学習指導要領の「自立活動」6区分 27 項目に、QOL 指標である WHO QOL26 と KINDL^R の項目を対応する（表 2～7）。KINDL^R に関しては、教育目標は基本的に教師が設定することから、他者評価質問紙となる小・中学生版（親用）の質問項目の内容を対象とすることとした。なお、表 2 から表 7 は、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）（文部科学省、2018）及び健康関連「生活の質」評価としての WHO QOL（田崎・中根、1998）、日本語版 KINDL^R（古荘・柴田・根本ら、2014）の項目をもとに著者が作成した。

表2 自立活動「1. 健康の保持」とWHO QOL26、KINDLR^Rの対応表

自立活動 「1. 健康の保持」	WHO QOL26	KINDLR ^R 小・中学生版 (親用)
(1)生活のリズムや生活習慣の形成に関すること (体温の調節、覚醒と睡眠など健康状態の維持・改善に必要な生活のリズムを身に付けること、食事や排泄などの生活習慣の形成、衣服の調節、室温の調節や換気、感染予防のための清潔の保持など健康な生活環境の形成を図ることを意味している。)	Q1 自分の生活の質をどのように評価しますか Q3 体の痛みや不快感のせいで、しなければならないことがどのくらい制限されていますか Q4 毎日の生活の中で治療(医療)がどのくらい必要ですか Q16 睡眠は満足いくものですか	1.(1) 私の子どもは自分が病気だと思っていたようだ 1.(3) 私の子どもは疲れてぐったりしていた 1.(4) 私の子どもは元気いっぱいと感じていたようだ 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ
(2)病気の状態の理解と生活管理に関すること (自分の病気の状態を理解し、その改善を図り、病気の進行の防止に必要な生活様式についての理解を深め、それに基づく生活の自己管理ができるようにすることを意味している。)	Q2 自分の健康状態に満足していますか Q3 体の痛みや不快感のせいで、しなければならないことがどのくらい制限されていますか Q4 毎日の生活の中で治療(医療)がどのくらい必要ですか Q19 自分自身に満足していますか	1.(1) 私の子どもは自分が病気だと思っていたようだ 1.(2) 私の子どもは頭痛がした、あるいは腹痛があった 1.(3) 私の子どもは疲れてぐったりしていた 1.(4) 私の子どもは元気いっぱいと感じていたようだ 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思っていたようだ 4.(2) 私の子どもは家で気持ちよく過ごしていた 5.(4) 私の子どもは他の子どもに比べて自分は変わっていると感じているようだ
(3)身体各部の状態の理解と養護に関すること (病気や事故等による神経、筋、骨、皮膚等の身体各部の状態を理解し、その部位を適切に保護したり、症状の進行を防止したりできるようにすることを意味している。)	Q2 自分の健康状態に満足していますか Q3 体の痛みや不快感のせいで、しなければならないことがどのくらい制限されていますか Q4 毎日の生活の中で治療(医療)がどのくらい必要ですか Q19 自分自身に満足していますか	1.(1) 私の子どもは自分が病気だと思っていたようだ 1.(2) 私の子どもは頭痛がした、あるいは腹痛があった 1.(3) 私の子どもは疲れてぐったりしていた 1.(4) 私の子どもは元気いっぱいと感じていたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思っていたようだ 4.(2) 私の子どもは家で気持ちよく過ごしていた 5.(4) 私の子どもは他の子どもに比べて自分は変わっていると感じているようだ
(4)障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること (自己の障害にどのような特性があるのか理解し、それらが及ぼす学習上又は生活上の困難についての理解を深め、その状況に応じて、自己の行動や感情を調整したり、他者に対して主体的に働きかけたりして、より学習や生活をしやすい環境にしていくことを意味している。)	Q3 体の痛みや不快感のせいで、しなければならないことがどのくらい制限されていますか Q9 あなたの生活環境はどのくらい健康的ですか Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q18 自分の仕事をする能力に満足していますか Q19 自分自身に満足していますか Q22 友人たちの支えに満足していますか Q24 医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満足していますか	1.(1) 私の子どもは自分が病気だと思っていたようだ 1.(2) 私の子どもは頭痛がした、あるいは腹痛があった 1.(3) 私の子どもは疲れてぐったりしていた 1.(4) 私の子どもは元気いっぱいと感じていたようだ 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 5.(1) 私の子どもは友達といろいろなことをしていた 5.(3) 私の子どもは友達とうまくやっていたようだ
(5)健康状態の維持・改善に関すること (障害のため、運動量が少なくなったり、体力が低下したりすることを防ぐために、日常生活における適切な健康の自己管理ができるようにすることを意味している。)	Q2 自分の健康状態に満足していますか Q3 体の痛みや不快感のせいで、しなければならないことがどのくらい制限されていますか Q4 毎日の生活の中で治療(医療)がどのくらい必要ですか	1.(1) 私の子どもは自分が病気だと思っていたようだ 1.(2) 私の子どもは頭痛がした、あるいは腹痛があった 1.(3) 私の子どもは疲れてぐったりしていた 1.(4) 私の子どもは元気いっぱいと感じていたようだ 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ

表3 自立活動「2. 心理的な安定」とWHO QOL26、KINDLRの対応表

自立活動 「2. 心理的な安定」	WHO QOL26	KINDLR小・中学生版（親用）
(1)情緒の安定に関すること (情緒の安定を図ることが困難な幼児児童生徒が、安定した情緒の下で生活できるようにすることを意味している。)	<p>Q5 毎日の生活をどのくらい楽しく過ごしていますか</p> <p>Q6 自分の生活をどのくらい意味あるものと感じていますか</p> <p>Q7 物事にどのくらい集中することができますか</p> <p>Q8 毎日の生活はどのくらい安全ですか</p> <p>Q11 自分の容姿（外見）を受け入れることができますか</p> <p>Q16 睡眠は満足いくものですか</p> <p>Q20 人間関係に満足していますか</p> <p>Q22 友人たちの支えに満足していますか</p> <p>Q26 気分がすぐれなかったり、絶望、不安、落ち込みといったいやな気分をどのくらいひんばんに感じますか</p>	<p>1.(4) 私の子どもは元気いっぱいと感じていたようだ</p> <p>2.(1) 私の子どもは楽しそうによく笑っていた</p> <p>2.(2) 私の子どもはつまらなさそうだった</p> <p>2.(3) 私の子どもは一人ぼっちだと感じていたようだ</p> <p>2.(4) 私の子どもはなにもないのにこわがったり、不安そうにしていた</p> <p>3.(1) 私の子どもは自信があったようだ</p> <p>3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ</p> <p>4.(2) 私の子どもは家で気持ちよく過ごしていた</p> <p>4.(3) 私たち親子は家でけんかをした</p> <p>4.(4) 私の子どもは親が取り仕切っていると感じていたようだ</p> <p>5.(3) 私の子どもは友達とうまくやっていたようだ</p> <p>6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいたようだ</p>
(2)状況の理解と変化への対応に関すること (場所や場面の状況を理解して心理的抵抗を軽減したり、変化する状況を理解して適切に対応したりするなど、行動の仕方を身に付けることを意味している。)	<p>Q7 物事にどのくらい集中することができますか</p> <p>Q3 体の痛みや不快感のせいで、しなければならぬことがどのくらい制限されていますか</p> <p>Q19 自分自身に満足していますか</p> <p>Q20 人間関係に満足していますか</p> <p>Q22 友人たちの支えに満足していますか</p> <p>Q23 家と家のまわりの環境に満足していますか</p> <p>Q24 医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満足していますか</p>	<p>2.(1) 私の子どもは楽しそうによく笑っていた</p> <p>2.(3) 私の子どもは一人ぼっちだと感じていたようだ</p> <p>2.(4) 私の子どもはなにもないのにこわがったり、不安そうにしていた</p> <p>3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いついたようだ</p> <p>4.(2) 私の子どもは家で気持ちよく過ごしていた</p> <p>5.(1) 私の子どもは友達といろいろなことをしていた</p> <p>5.(3) 私の子どもは友達とうまくやっていたようだ</p> <p>6.(1) 私の子どもは学校での勉強を簡単そうにやっていた</p> <p>6.(3) 私の子どもは将来のことを心配していたようだ</p>
(3)障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること (自分の障害の状態を理解したり、受容したりして、主体的に障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲の向上を図ることを意味している。)	<p>Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか</p> <p>Q18 自分の仕事をする能力に満足していますか</p> <p>Q26 気分がすぐれなかったり、絶望、不安、落ち込みといったいやな気分をどのくらいひんばんに感じますか</p>	<p>1.(1) 私の子どもは自分が病氣だと思っていたようだ</p> <p>1.(3) 私の子どもは疲れてぐったりしていた</p> <p>2.(1) 私の子どもは楽しそうによく笑っていた</p> <p>2.(2) 私の子どもはつまらなさそうだった</p> <p>2.(3) 私の子どもは一人ぼっちだと感じていたようだ</p> <p>2.(4) 私の子どもはなにもないのにこわがったり、不安そうにしていた</p> <p>3.(1) 私の子どもは自信があったようだ</p> <p>3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ</p> <p>3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ</p> <p>3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いついたようだ</p> <p>4.(2) 私の子どもは家で気持ちよく過ごしていた</p> <p>6.(1) 私の子どもは学校での勉強を簡単そうにやっていた</p> <p>6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいたようだ</p> <p>6.(3) 私の子どもは将来のことを心配していたようだ</p>

表4 自立活動「3. 人間関係の形成」とWHO QOL26、KINDLR小・中学生版（親用）の対応表

自立活動 「3. 人間関係の形成」	WHO QOL26	KINDLR <small>小・中学生版</small> （親用）
(1) 他者とのかかわりの基礎に関する こと (人に対する基本的な信頼感をもち、 他者からの働き掛けを受け止め、それ に応ずることができるようにすること を意味している。)	Q13 毎日の生活に必要な情報をど のくらい得ることができますか Q15 家の周囲を出回ることがよく ありますか Q20 人間関係に満足していますか Q22 友人たちの支えに満足してい ますか	2.(1) 私の子どもは楽しそうによく笑っていた 2.(3) 私の子どもは一人ぼっちだと感じていた ようだ 5.(1) 私の子どもは友達といろいろなことをし ていた 5.(2) 私の子どもは他の子どもたちに好かれて いたようだ
(2) 他者の意図や感情の理解に関する こと (他者の意図や感情を理解し、場に応 じた適切な行動をとることができるよ うにすることを意味している。)	Q13 毎日の生活に必要な情報をど のくらい得ることができますか Q14 余暇を楽しむ機会ほどのくら いありますか Q15 家の周囲を出回ることがよく ありますか Q20 人間関係に満足していますか Q22 友人たちの支えに満足してい ますか	2.(1) 私の子どもは楽しそうによく笑っていた 2.(3) 私の子どもは一人ぼっちだと感じていた ようだ 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると 感じたようだ 4.(3) 私たち親子は家でけんかをした 5.(1) 私の子どもは友達といろいろなことをし ていた 5.(2) 私の子どもは他の子どもたちに好かれて いたようだ
(3) 自己の理解と行動の調整に関する こと (自分の得意なことや不得意なこと、 自分の行動の特徴などを理解し、集団 の中で状況に応じた行動ができるよ うになることを意味している。)	Q14 余暇を楽しむ機会ほどのくら いありますか Q17 毎日の活動をやり遂げる能力 に満足していますか Q18 自分の仕事をする能力に満足 していますか Q19 自分自身に満足していますか	1.(4) 私の子どもは元気いっぱいと感じていた ようだ 2.(1) 私の子どもは楽しそうによく笑っていた 2.(3) 私の子どもは一人ぼっちだと感じていた ようだ 3.(1) 私の子どもは自信があったようだ 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると 感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いつ いたようだ 4.(1) 私の子どもは親とうまくいっていた 5.(3) 私の子どもは友達とうまくやっていたよ うだ
(4) 集団への参加の基礎に関する こと (集団の雰囲気に合わせたり、集団に 参加するための手順やきまりを理解し たりして、遊びや集団活動などに積極 的に参加できるようになることを意味 している。)	Q15 家の周囲を出回ることがよく ありますか Q20 人間関係に満足していますか Q22 友人たちの支えに満足してい ますか	3.(1) 私の子どもは自信があったようだ 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると 感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いつ いたようだ 5.(1) 私の子どもは友達といろいろなことをし ていた 5.(2) 私の子どもは他の子どもたちに好かれて いたようだ 5.(3) 私の子どもは友達とうまくやっていたよ うだ 6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいた ようだ

表5 自立活動「4. 環境の把握」とWHO QOL26、KINDLR[®]の対応表

自立活動 「4. 環境の把握」	WHO QOL26	KINDLR [®] 小・中学生版 (親用)
(1) 保有する感覚の活用に関すること (保有する視覚、聴覚、触覚、嗅覚、固有覚、前庭覚などの感覚を十分に活用できるようにすることを意味している。なお、固有覚とは、筋肉や関節の動きなどによって生じる自分自身の身体の情報を受け取る感覚であり、主に力の加減や動作等に関係している感覚である。固有覚のはたらきにより、運動は絶えず軌道修正され、目を閉じていてもある程度正しく運動することができる。)	Q3 体の痛みや不快感のせいで、しなければならないことがどのくらい制限されていますか Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q18 自分の仕事をする能力に満足していますか	1.(1) 私の子どもは自分が病気だと思っていたようだ 1.(3) 私の子どもは疲れてぐったりしていた 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いついたようだ 6.(1) 私の子どもは学校での勉強を簡単にやっていた 6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいたようだ
(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること (障害のある幼児児童生徒一人一人の感覚や認知の特性を踏まえ、自分に入ってくる情報を適切に処理できるようにするとともに、特に自己の感覚の過敏さや認知の偏りなどの特性について理解し、適切に対応できるようにすることを意味している)	Q3 体の痛みや不快感のせいで、しなければならないことがどのくらい制限されていますか Q13 毎日の生活に必要な情報をどのくらい得ることができますか Q23 家と家のまわりの環境に満足していますか Q25 周辺の交通の便に満足していますか	1.(1) 私の子どもは自分が病気だと思っていたようだ 1.(3) 私の子どもは疲れてぐったりしていた 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いついたようだ 6.(1) 私の子どもは学校での勉強を簡単にやっていた 6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいたようだ
(3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること (保有する感覚を用いて状況を把握しやすくするよう各種の補助機器を活用できるようにしたり、他の感覚や機器での代行的にできるようにしたりすることを意味している。)	Q3 体の痛みや不快感のせいで、しなければならないことがどのくらい制限されていますか Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q18 自分の仕事をする能力に満足していますか	1.(1) 私の子どもは自分が病気だと思っていたようだ 1.(3) 私の子どもは疲れてぐったりしていた 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 6.(1) 私の子どもは学校での勉強を簡単にやっていた 6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいたようだ 6.(3) 私の子どもは将来のことを心配していたようだ
(4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること (いろいろな感覚器官やその補助及び代行手段を総合的に活用して、情報を収集したり、環境の状況を把握したりして、的確な判断や行動ができるようにすることを意味している。)	Q13 毎日の生活に必要な情報をどのくらい得ることができますか Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q18 自分の仕事をする能力に満足していますか	1.(1) 私の子どもは自分が病気だと思っていたようだ 1.(3) 私の子どもは疲れてぐったりしていた 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いついたようだ 6.(1) 私の子どもは学校での勉強を簡単にやっていた 6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいたようだ 6.(3) 私の子どもは将来のことを心配していたようだ
(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること (ものの機能や属性、形、色、音が変化する様子、空間・時間等の概念の形成を図ることによって、それを認知や行動の手掛かりとして活用できるようにすることを意味している。)	Q13 毎日の生活に必要な情報をどのくらい得ることができますか Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q18 自分の仕事をする能力に満足していますか	3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いついたようだ 6.(1) 私の子どもは学校での勉強を簡単にやっていた

表6 自立活動「5. 身体の動き」とWHO QOL26、KINDL^Rの対応表

自立活動 「5. 身体の動き」	WHO QOL26	KINDL ^R 小・中学生版（親用）
(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること (日常生活に必要な動作の基本となる姿勢保持や上肢・下肢の運動・動作の改善及び習得、関節の拘縮や変形の予防、筋力の維持・強化を図ることなどの基本的技能に関することを意味している。)	Q3 体の痛みや不快感のせいで、しなければならないことがどのくらい制限されていますか Q7 物事にどのくらい集中することができますか Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q26 気分がすぐれなかったり、絶望、不安、落ち込みといったいやな気分をどのくらいひんばんに感じますか	1.(3) 私の子どもは疲れてぐったりしていた 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いついたようだ 4.(2) 私の子どもは家で気持ちよく過ごしていた 6.(1) 私の子どもは学校での勉強を簡単そうにやっていた 6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいたようだ 6.(3) 私の子どもは将来のことを心配していたようだ
(2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること (姿勢の保持や各種の運動・動作が困難な場合、様々な補助用具等の補助的手段を活用してこれらができるようにすることを意味している。)	Q3 体の痛みや不快感のせいで、しなければならないことがどのくらい制限されていますか Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q18 自分の仕事をする能力に満足していますか Q24 医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満足していますか	1.(3) 私の子どもは疲れてぐったりしていた 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 4.(2) 私の子どもは家で気持ちよく過ごしていた 6.(1) 私の子どもは学校での勉強を簡単そうにやっていた 6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいたようだ
(3) 日常生活に必要な基本動作に関すること (食事、排泄、衣服の着脱、洗面、入浴などの身辺処理及び書字、描画等の学習のための動作などの基本動作を身に付けることができるようにすることを意味している)	Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q18 自分の仕事をする能力に満足していますか	1.(4) 私の子どもは元気いっぱいと感じていたようだ 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいたようだ 6.(3) 私の子どもは将来のことを心配していたようだ
(4) 身体の移動能力に関すること (自力での身体移動や歩行、歩行器や車いすによる移動など、日常生活に必要な移動能力の向上を図ることを意味している。)	Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q18 自分の仕事をする能力に満足していますか Q19 自分自身に満足していますか Q24 医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満足していますか	1.(4) 私の子どもは元気いっぱいと感じていたようだ 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいたようだ 6.(3) 私の子どもは将来のことを心配していたようだ
(5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること (作業に必要な基本動作を習得し、その巧緻性や持続性の向上を図るとともに、作業を円滑に遂行する能力を高めることを意味している。)	Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q18 自分の仕事をする能力に満足していますか Q19 自分自身に満足していますか	3.(1) 私の子どもは自信があったようだ 3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いついたようだ 6.(1) 私の子どもは学校での勉強を簡単そうにやっていた 6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいたようだ 6.(3) 私の子どもは将来のことを心配していたようだ

表7 自立活動「6. コミュニケーション」とWHO QOL26、KINDL^Rの対応表

自立活動 「6. コミュニケーション」	WHO QOL26	KINDL ^R 小・中学生版（親用）
(1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること (幼児児童生徒の障害の種類や程度、興味・関心等に応じて、表情や身振り、各種の機器などを用いて意思のやりとりが行えるようにするなど、コミュニケーションに必要な基礎的な能力を身に付けることを意味している。)	Q5 毎日の生活をどのくらい楽しく過ごしていますか Q19 自分自身に満足していますか Q20 人間関係に満足していますか Q22 友人たちの支えに満足していますか	3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 4.(1) 私の子どもは親とうまくいっていた 5.(1) 私の子どもは友達といろいろなことをしていた 5.(2) 私の子どもは他の子どもたちに好かれていたようだ 5.(3) 私の子どもは友達とうまくやっていたようだ 6.(1) 私の子どもは学校での勉強を簡単そうにやっていた 6.(2) 私の子どもは学校の授業を楽しんでいたようだ
(2) 言語の受容と表出に関する こと (話し言葉や各種の文字・記号等を用いて、相手の意図を受け止めたり、自分の考えを伝えたりするなど、言語を受容し表出することができるようにすることを意味している)	Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q19 自分自身に満足していますか Q20 人間関係に満足していますか Q22 友人たちの支えに満足していますか	3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いついたようだ 5.(1) 私の子どもは友達といろいろなことをしていた 5.(2) 私の子どもは他の子どもたちに好かれていたようだ 5.(3) 私の子どもは将来のことを心配していたようだ
(3) 言語の形成と活用に関する こと (コミュニケーションを通して、事物や現象、自己の行動等に対応した言語の概念の形成を図り、体系的な言語を身に付けることができるようにすることを意味している。)	Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q19 自分自身に満足していますか Q20 人間関係に満足していますか Q22 友人たちの支えに満足していますか	3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いついたようだ 4.(1) 私の子どもは親とうまくいっていた 4.(3) 私たち親子は家でけんかをした 5.(1) 私の子どもは友達といろいろなことをしていた 5.(2) 私の子どもは他の子どもたちに好かれていたようだ 5.(3) 私の子どもは将来のことを心配していたようだ
(4) コミュニケーション手段の 選択と活用に関する こと (話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段を適切に選択・活用し、他者とのコミュニケーションが円滑にできるようにすることを意味している)	Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q19 自分自身に満足していますか Q20 人間関係に満足していますか Q22 友人たちの支えに満足していますか Q24 医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満足していますか	3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いついたようだ 4.(1) 私の子どもは親とうまくいっていた 5.(1) 私の子どもは友達といろいろなことをしていた 5.(2) 私の子どもは他の子どもたちに好かれていたようだ 5.(3) 私の子どもは将来のことを心配していたようだ
(5) 状況に応じたコミュニケーションに関する こと (コミュニケーションを円滑に行うためには、伝えようとする側と受け取る側との人間関係や、そのときの状況を的確に把握することが重要であることから、場や相手の状況に応じて、主体的にコミュニケーションを展開できるようにすることを意味している。)	Q5 毎日の生活をどのくらい楽しく過ごしていますか Q17 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか Q19 自分自身に満足していますか Q20 人間関係に満足していますか Q22 友人たちの支えに満足していますか	3.(2) 私の子どもはいろいろなことができると感じたようだ 3.(3) 私の子どもは自分に満足していたようだ 3.(4) 私の子どもはいい考えをいろいろ思いついたようだ 4.(1) 私の子どもは親とうまくいっていた 4.(3) 私たち親子は家でけんかをした 5.(1) 私の子どもは友達といろいろなことをしていた 5.(2) 私の子どもは他の子どもたちに好かれていたようだ 5.(3) 私の子どもは将来のことを心配していたようだ

IV. 考察

本研究は、重度・重複障害児への教育は「自立活動」の項目内容を直接的に教育目標に設定することの課題や新学習指導要領で求められている、子どもたちが「何ができるようになるのか」、資質・能力を育成するために「何を学ぶのか」という具体的な教育目標を示すことの課題に対し、特に重度・重複障害児の教育で重要となる自立活動の内容を QOL 尺度と対応分析を行い、具体的な教育目標として活用できるのではないかを考察してきた。

新学習指導要領の自立活動 6 区分 27 項目に 2 つの QOL 尺度を対応した結果、すべての項目が自立活動の内容に含まれる可能性があることが分かった。池田 (2014) は、「教育分野においては、重度・重複障害児の QOL に関する文献が医療・福祉分野の文献に比して数が少ない。教育の本質的な目標として、人生の質を高める、豊かな人生を送ると、といった QOL の理念が含まれるため、改めてこの用語を用いていないということも考えられる。」と指摘している通り、教育の本質が子どもの QOL の向上を示しているためこの結果になったと考えられる。

小原・権・韓 (2014) は病弱教育における教育成果検証ツール開発の研究の中で、自立活動 6 区分と HRQOL (SF-36) 8 領域の関係性を分析し、HRQOL の「体の痛み」以外の 7 領域はそれぞれ対応し、自立活動と HRQOL は関係性があることが明らかとなった。の中で、「コミュニケーション」においては、HRQOL の領域に該当しないものとして「文字や絵カードを使って文字の定着や語彙数を増やす」指導や、「身近な生活の中で文字に触れる機会を増やし、文字指導に関する取り組みを行う」指導等、言語の受容や表出に関する指導について、HRQOL (SF-36) には言語に含まれていないことを指摘している。今回使用した、WHO QOL26 と KINDLR に関しても言語に関する領域はなかったため、言語コミュニケーションにおける QOL 向上の観点での研究が今後求められてくると考えられる。

また、自立活動の内容に当てはまらなかった QOL 尺度の項目内容として、WHO QOL26 の「Q12 必要なものが買えるだけのお金を持っていますか」、「Q21 性生活に満足していますか」の 2 つがどの区分にも該当しなかった。この 2 つの項目に関しては、WHO QOL26 は 18 歳以上を対象としていることもあり、義務教育段階の児童・生徒には該当しない項目となったのではないかと考える。しかし、「Q12 必要なものが買えるだけのお金を持っていますか」の経済に関する学習においては、重度・重複障害者の中でも、職業につき経済的自立を図る人たちも多くいる。重度・重複障害といっても、先述したように障害の程度や種類は様々であるため、学校教育で取り組むことも重度・重複障害教育の課題であると考えられる。また、「Q21 性生活に満足していますか」に関しても、学校教育においては性教育に該当すると考える。船越・小原 (2017) は、「子どもの権利条約」の第 34 条には、「性的搾取及び性的虐待から児童を保護すること」が明記されており、障害のある子どもも含めて、性的搾取や性的虐待から保護するためには、「性を知ること、性を学ぶこと」がもっとも重要である。「性を学ぶこと」は、障害の有無に関わらず、当たり前の「権利」であり、それに携わる人たちは「性の学び」を提供していくことが必要であると考えられる」と指摘している。このことから、学校教育において子ども QOL 向上を考える際、性教育は欠かせないことだと考える。

先述したが、長野・川間 (2018) は、特別支援学校 (肢体不自由) に在籍する重複障害児のうち、知的障害を併せ有し意思表示に困難のある重度・重複障害児は、見た目の障害の重

さによって知的機能の側面も低く捉えられがちである、と指摘している。これは経済的な学習や性教育にも共通することと考えられる。

いずれにせよ、自立活動の内容と2つのQOL尺度の項目が対応していることが分かった。今後、「自立活動」を観点とし、QOL尺度の項目内容を子どもたちへの教育目標として活用できる可能性があることが明らかとなった。

文献

- 1) 小原愛子・韓昌完(2015) インクルーシブ教育とQOLの観点に基づいた重度・重複障害児の教育課程・指導法の分析と考察. 琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要, 6, 35-45.
- 2) 文部科学省(2017) 特別支援学校幼稚部教育要領小学部・中学部学習指導要領. 海文堂出版.
- 3) 長野実和・川間健之介(2018) 重度・重複障害児教育において対象児の実態把握のためにツールを使用することの課題と可能性—教育実践論文の文献調査から—. 障害科学研究, 42, 173-183. doi:10.20847/adsj.42.1_173
- 4) 板野幸恵(1996) ADLとQOL. 漆崎一朗・栗原稔(監修)QOLその概念から応用まで. シュプリンガー・フェアクラーク東京.
- 5) 文部科学省(2015) 初等中等教育分科会(第100回)配布資料. www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm
- 6) 佐島毅(2009) 重複障害教育の展開. 明石書店.
- 7) 姉崎弘(2012) 重度・重複障害児の自立活動における「スヌーズレン教育」の意義について. 三重大学教育学部研究紀要, 63, 297-314.
- 8) 田崎美弥子・中根允文(1998) 健康関連「生活の質」評価としてのWHOQOL. 行動計量, 25(2), 70-80. doi: 10.2333/jbhmk.25.76
- 9) 古荘純一・柴田玲子・根本芳子・松寄くみ子(2014) 子どものQOL尺度 その理解と活用—心身の健康を評価する日本語版KINDLR—. 株式会社診断と治療社.
- 10) 池田吏志(2014) 重度・重複障害児のQOL評価に関する文献レビュー. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 63, 59-66. doi: 10.15027/36618
- 11) 小原愛子・權偕珍・韓昌完(2014) 病弱児への教育的対応とその教育成果検証ツールとしての健康関連QOLの活用可能性について. *Asian Journal of Human Services*, 6, 59-71. doi: 10.14391/ajhs.6.59
- 12) 船越裕輝・小原愛子(2017) QOLの観点に基づいた性教育の成果評価尺度の開発. *Total Rehabilitation Research*, 4, 47-60. doi: 10.20744/trr.4.0_47



JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION

EDITORIAL BOARD

EDITOR-IN-CHIEF

Changwan HAN University of the Ryukyus (Japan)

EXECUTIVE EDITORS



Aiko KOHARA
University of the Ryukyus

Keita SUZUKI
Kochi University

Shogo HIRATA
Ibaraki Christian University

Atsushi TANAKA
Sapporo Gakuin University

Kenji WATANABE
Kio University

Takahito MASUDA
Hirosaki University

Chaeyoon CHO
Tohoku University

Kohei MORI
Mie University

Takashi NAKAMURA
University of Teacher Education Fukuoka

Eonji KIM
Miyagi Gakuin Women's University

Liting CHEN
Mejiro University

Takeshi YASHIMA
Joetsu University of Education

Haejin KWON
University of Miyazaki

Mari UMEDA
Miyagi Gakuin Women's University

Tomio HOSOBUCHI
Saitama University

Hideyuki OKUZUMI
Tokyo Gakugei University

Mika KATAOKA
Kagoshima University

Toru HOSOKAWA
Tohoku University

Ikuno MATSUDA
Soongsil University

Minji KIM
National Center for Geriatrics and Gerontology

Toshihiko KIKUCHI
Mie University

Kazuhito NOGUCHI
Tohoku University

Nagako KASHIKI
Ehime University

Yoshifumi IKEDA
Joetsu University of Education

EDITORIAL STAFF

EDITORIAL ASSISTANTS

Mamiko OTA Tohoku University / University of the Ryukyus

Sakurako YONEMIZU University of the Ryukyus

as of April 1, 2018

JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION

VOL.7 AUGUST 2019

© 2019 Asian Society of Human Services

Presidents | Masahiro KOHZUKI & Sunwoo LEE

Publisher | Asian Society of Human Services
#216-1 Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1, Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa,
903-0213, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production | Asian Society of Human Services Press
#216-1 Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1, Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa,
903-0213, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

Disaster Nursing Education in Nursing Colleges in Japan

Kouichi TAKAHASHI et al. 1

An Empirical Study of Curriculum and Teaching Methods for Intellectual Disabilities based on the Point of the New Course of Study; Analysis of Longitudinal Data using the Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT)

Mamiko OTA et al. 16

The Verification of Reliability and Discriminative Validity of Tools for Understanding and Support of Various Students in Regular School; From the Viewpoint of Special Needs Education Specialization

Shizuko TAMANAHA et al. 26

International Comparative Study on Special Needs Education; Focusing on the Historical Development of Educational Policy

Minji KIM et al. 40

Challenges in Setting Educational Target for Children of Profound Intellectual and Multiple Disabilities and the Possibilities of Utilizing QOL Index

Haruna TERUYA et al. 50